The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	＜書評＞ Edward W.Said, "The world, the Text, and the Critic", Harvard University Press, 1983
Author(s)	有田, 亘
Citation	年報人間科学. 1993, 14, p. 131-135
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/10486
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

◇書　評◇

Edward W. Said

The World, the Text, and the Critic

Harvard University Press, 1983

有田　亘

本書は序章・終章を含めて全部で十四の論文集の形をとっており、その構成は次のようになっている。序、一章、及び終章は本書の全体的な議論。二〜四章はスウィフト、コンラッドの作品分析。五、六章はそれぞれ反復と独創性についての理論的考察。七〜十章は前半の議論を踏まえた上での現代批評理論の批判的検討（具体的にはマルクス主義批評、フーコー、デリダなどが取り上げられる）。そして十一、十二章は本書の議論のオリエンタリズムをめぐる議論への適用である。

著者エドワード・サイードによれば、本書は彼の一九七五年の著作『始まりの現象』をはさむ一九六九年から八一年までの十二年間にわたって執筆されたものであり、それゆえ本書の議論は基本的に『始まりの現象』の議論を踏まえる形で展開されている。『始まりの現象』の問題意識がテクストを「どう始めるか」であったとすれば、本書の問題意識は「どう続けるか」であるとも言えるだろう。以下この観点から、重要であると思われる五、六章の議論を中心に据えつつ、本書の内容を見ていくことにする。

続ける方法 ―― 本書では、結びつき（relationship）や連続性（continuity）をどう見い出すか、という形で論じられる ―― には二つあって、嫡出関係（filiation）と非嫡出関係（affiliation）がそれである。嫡出関係とは、親から子へ、子から孫へという生物学的連鎖のような連続性を持つ形で作られる結びつきを意味する。たとえば「この小説はこの作家の作品だ」と言うとき、嫡出関係による結びつきが見られる。そして、嫡出関係にあるものの間での、自然

で固有な（natural and proper）結びつきによって権威=著者性（authority）や起源=独創性（originality）が維持・存続される、とテクストの水準では言うことができる。

だが近代社会においてはこの自然な嫡出性は困難である、というか究極的には不可能である。サイードはルカーチと次のようなヴィジョンを共有している。物象化――人間が生み出したものからの人間の疎外――の進んだ近代社会においては、あらゆるものが、自然な結びつきすら現実に作ることができない存在論的カテゴリーに原子化され、閉じこめられ、互いに完全に切り離されている。それゆえ「子供のないカップル、孤児、中絶、独身者は高度な近代主義的世界の特徴的な住民であり、それは嫡出的関係の困難さを示している。」

嫡出関係は次第に非嫡出関係にとって代わられる。嫡出関係の自然な絆を、非嫡出関係は超個人的な形態――仲間意識、コンセンサス、専門家的観点、階級、支配的文化のヘゲモニーなど――に変化させる。つまり非嫡出関係とは、ある種の共同体的なものへの参加によって形成される結びつきを意味する。あるいは、嫡出関係が自然と「生」の領域に属しているのに対し、非嫡出関係は文化と社会に属すると言ってもよい。もはや家系的な縦のつながりが見い出されないとき、代わりに横のつながりが求められ、それによって失われた権威や起源を復元しようという動きが生じることは容易に理解できよう。

このようなサイードの立場の下敷きとなっているのはヴィーコの『新しい学』の思想である。ヴィーコによれば、人類を存続させる知的パターンは反復である。人間の行動は常に非合理性へと陥る可能性を孕んでいるが、人間精神は、ある固定的な出来事の推移に従って同じことを反復することによって、人間の歴史を存続させていることが確認できる。無限の性交の代わりに婚姻がある、抑制を欠いた独裁政治の代わりに法と民主主義がある、などというように。この婚姻、法、国家などの制度の反復は、神性の反映ではなく、人類が知性によって、自発的な選択によって行うものである、とヴィーコは言う。あらゆるものの中に不変的なもの（神性）が保たれているのではなく、自発的な選択の結果反復という形で同じもの（結果的に不変なもの）が見つかる、というわけである。つまり、人間の歴史は人間によって作られるだけでなく、人間の歴史が自らを反復する円環に従うことによっても作られる。

ここで反復は、歴史と現実はすべて人間の存続にかかわっており、神の起源=独創性にかかわってはいないということを示すのに役立つ、という認識論的地位を与えられている。ヴィーコは人類の歴史を「世俗=地上的（gentile）」であると規定するが、それは第一に、人知を超越した唯一不変の普遍的原理（神）とは無関係であるという意味においてである。だがこの用語法は一連の関連した意味群を踏まえて採用されているのであって、gentile には第二に、「異教徒的」という意味も含まれる。すなわち、ヴィーコは人類を巨人の末裔である異教徒とヘブライ人の二つに区別しており、それらの歴史は別々に論議しなければならないとする。人類の歴史はヘブライ

人という一民族に特有の歴史（旧約聖書に記された歴史）だけに限定されない、というわけである。さらに第三に、世俗=地上的歴史は氏族（gens）の歴史でもある。「氏族」という語の派生語をめぐる語源学的な語呂合わせにヴィーコは（サイードも）強く魅了されていた。歴史は男女が子を生み、苦労して育てるというまさにその仕方によって生み出され、生産され、再生産されるものなのである。こうしてヴィーコの歴史イメージは生物学的で家系的であり、それゆえ世俗=地上的という用語はサイードの言う嫡出関係と同義語であることが理解されるだろう。

しかし、ヴィーコは反復を嫡出関係とみなしているが、嫡出関係というのは問題を孕んでおり、不用意に必然的だと言い切ることはできない。ヴィーコの歴史叙述には嫡出関係に対する強迫観念があるが、そのことはこれまで重視されてこなかった、とサイードは指摘する。ここで問題となっているのは、歴史がもはや不変の神性の介入の結果とみなされないのなら、歴史はどのようにして生み出され、どのように自らを再生産するのか、ということである。

ヴィーコの同時代人（ビュフォンなど）は、世代間の伝達（遺伝）を志向している。再生産とはある世代から次の世代へと有機的要素の伝達される過程のことであり、特徴の反復は次の世代の中に保証される。つまり反復とは同質性のことであって、ヴィーコも、彼が「歴史は精神から生じる」などと言うときにはこの意味の反復概念を用いている。だが遺伝は発生理論を含んでおり、受動的な記憶なのではない。世代は闘争を含んでいる。これはヴィーコの世俗=地上的歴史の本質でもある。父と子の世代間での闘争によって反復と同時に差異が生まれる。単に祖先からの遺伝なら、神性の保存と特に変わるところはない。嫡出関係はある観点からすれば再現だが、別の観点、つまり人間の存在形態としての歴史という観点からすれば、それは差異である。反復（再現）と差異との間で嫡出関係についてのヴィーコの思考はためらいを見せるが、それは本当は、一方の不変の、普遍的な、定常的で繰り返されるものへの関心と、他方のオリジナルで変革的でユニークで偶発的なものへの関心との間のためらいなのである。

結局ヴィーコは反復の同質性を語りながら、反復の中で失われたものと得られたもの、つまり差異に敏感に着目してしまう。以上のことから嫡出関係と非嫡出関係の複雑な関わりがわかる。それは単に「嫡出関係から非嫡出関係へ」というような発展図式ではない。むしろ提出されているのは二項対立的な闘争のモデルである。嫡出関係においては、権威=著者性や起源=独創性といった同一性が、あらかじめ存在していることが前提となっており、そのような自然で固有な性格ゆえに、同一性を維持することによる結びつきというものが可能となる。しかし今までの議論から明らかなように、同一性の維持に基づく結びつき（嫡出関係）は不可避的に差異を孕み、それだけでは存続しえない。結びつけるためには、何らかの形で同一性を生み出し続けなければならないのである。ここに、同一性を再生産する結びつき（非嫡出関係）、つまり政治的な過程が当然のことながら介入してくる。これがヴィーコを批判的に摂取することで

サイードが描き出したイメージである。

したがって、あらゆるテクストの読み、生産、伝達には政治的・社会的・人間的価値が入り込み、それはたいていの場合巧妙に隠蔽されており、批判意識のたどる道は、それを暴き出すことに不可避的に行き着く、とサイードは主張する。テクストの嫡出性=正統性を疑ってもみず、テクストを単に現実の状況に翻訳してみせるだけの者は批評家とは言えず、聖職者、錬金術師のようなものにすぎない。そのような宗教的批評（religious criticism）に代わって必要とされるのは、テクストはどんなときでも常に状況や社会にとらわれた存在の仕方を持っており、批評家は状況の生産者であると同時にその影響を被ってもいる、ということを考慮に入れた批評である。要するに、テクストは世界の中に（in the world）あり、それゆえに世俗的（worldly）なのである。サイードがそのような批評を世俗的批評（secular criticism）と名づける理由はここにある。

しかしながら、サイードは嫡出関係=同質性と非嫡出関係=差異という対立する二項のうちどちらかを最終的に選択しているというわけではない、ということをここで強調しておかなければならない。彼は両者の「有機的共犯関係」について、「非嫡出関係は自然に見い出された嫡出的過程を表象する」と述べている。つまり、嫡出関係は非嫡出関係によっていわば「でっちあげられた」ものだが、それでも嫡出関係がないことには、非嫡出関係は正当化された社会・文化形態とはなりえない。だからこそ「われわれ」、つまり非嫡出的絆を持つ者たちは、一方で、自然で固有で正当なものの結びつき（嫡出関係）を維持しようしてテクストに政治的次元を持ち込む。だが同時に、その政治的次元を隠蔽しようともする。嫡出関係が実は非嫡出関係という自然でも固有でも正当でもないものの産物である、ということの痕跡を排除せねばならないのである。彼自身の言葉によれば、「私の立場は、現代の批判的意識は、二つの批判的意識に関わる力によって表象された誘惑の間に存在する、というものである。一つは批評家が嫡出的に確定する文化であり、もう一つは非嫡出的に獲得された方法とシステムである。」

ところで、嫡出・非嫡出関係によって起源=独創性をめぐる問題――つまり「始まり」の問題――を取り扱うこともできる。これまでの議論から明らかなように、サイードは自然で不変なものを普遍的で優越した存在として定言的に押しつけるような議論を批判している。これは批評理論にとって、理論的的興味の単位（unit）の見直しを迫ることになる。文学を理論的に探求する場合、何に焦点が当てられるべきなのか？　テクスト、著者、時代、あるいは思想といった伝統的な興味の単位には不満がある。というのも、これらの議論においては常に、起源=独創性が質的価値として仮定されているからである。サイードにとって、起源=独創性とはある人の経験を別の人に対して、限りなくそして多分場合によっては暴力的に置き換えることだ、とすら言える。

しかしその点でそれを放っておくよりも、エクリチュール（writing）自体を、同定可能な力が行使され、あるものは結びつけられ、他のものは置き換えられ、さらに別のものは取り戻されるよ

うな活動として研究する、という方向が提示される。分析対象としてのエクリチュールの価値とは、われわれが印象的・感覚的に起源=独創性と結びつけている、存在（テクスト）と不在（嫡出的同一性）の交錯をより正確なものにすることである。ここで仮定されているのは、そこから書こうという決心が出てくる偶発的で世俗的な状況あるいは条件である。研究の単位は、作者に意図された行為（performance）に求められ、それは問題の作家にとって書くという意図を可能にしたり生み出したりしたと思えるそれらの状況によって決定される。こうして文体（ないし個人言語）や構造といった比較的最近の図式は、興味深い分析方法（文体分析と構造分析）を生み出してきた。これらは文献学のような伝統的な方法より、現代言語学と提携している。現代言語学はそれ自体、言語行為を可能にする言語世界の研究に基づいている。

このように考えるなら、起源=独創性は明らかに補助的なものであることがわかる。創造的=オリジナルな著作は一次的で、批判的=解釈的著作は二次的だという区別に西欧の文学研究はふりまわされてきたが、内在的には所与のものとして与えられている著作としての文学を研究することは、絶え間のない、さまざまな、高度に不自然で抽象的な書きたいという願望から生じたその文学を自然で具体的なものとして扱うことと同じである。したがって、サイードは嫡出的な神学における起源=独創性ではなく、社会に非嫡出的に加わることによって自然に対抗して書くことを主張する。

しかしもちろん、この非嫡出性自体が嫡出性のでっちあげとその隠蔽から成っていることも確かである。著者や作品といった機能的な限界を純粋に超越したエクリチュールといっても、現実にはそのすべてを研究する時間も能力もないのだから、明確に区分されたエクリチュールを起源=独創的なものとして生じさせるような、はっきりとした意図や欲望を分析せざるをえない。現代文学の起源=独創性からの離脱（引用・反復・パロディなど）が、かえって起源=独創性を強化するという逆説がこうして生じる。

彼の批評は、彼自身の言葉によると一貫して「対抗的（oppositional）」でなければならない。つまり、もし批評がある教義や個個の問題に対する政治的立場に還元できるとするなら、またそれが世俗的で自覚的なものなら、そのアイデンティティは文化的活動や思考の体系とは異なったところになければならない。では、そのような批評的言説とは具体的にいったいどのようなものなのだろうか？　サイードはオルターナティヴを見い出せない、ある種の膠着的な議論を展開したようにも見える。しかしこの膠着性が現代のわれわれが引き受けねばならないある特殊な状況に深く結びついていることを、彼は示そうとしているようにも思える。